

寛克彦の未公刊書籍『惟神大道』について

中道豪 一

はじめに

本稿は寛克彦（明治五〜昭和三六）の未公刊書籍『惟神大道』について考察を加えた。

『惟神大道』は昭和一九年、満州国新京で行われた寛克彦による満州康德帝、いわゆる満州国皇帝愛新覺羅溥儀への御進講（全二〇回）を記録した書物である。そもそもこの御進講の存在は、溥儀の手記『我的前半生』（邦題「わが半生」）を始め広く知られるところだったが、その内容を記録した進講録の存在が脚光を浴びることはなかった。無論、その存在は三瀧信吾（大正五〜平成一五）をはじめ、寛の関係者らによつて指摘されていたものの、戦後の出版状況を始めとする諸般の事情から公刊の機を得ず、御進講内容は長く詳らかにされてこなかったという事情がある。よつて『惟神大道』は長く未公刊史料としてその名を留め

るに至っていた。

そうした中、平成一五年一月より、寛克彦・三瀧信吾に縁ある団体三瀧修学院が、その機関誌『八重垣』に『惟神大道』の掲載を開始した。会員限定の機関誌における公開ゆえ書籍としての公刊とは言えないものの、少なくとも未公開史料の座を脱したといえよう。しかし平成二七年現在、その内容が広く周知されているとはいえず、実質的に未公刊史料としての環境にあるというのが実状である。

本稿はそうした経緯のある『惟神大道』について、三瀧信吾旧蔵の原本と三瀧修学院によつて活字化されたテキストを校合した上で、そこに見られる神道論を神道教育研究の立場より吟味することを目的とした。具体的には『惟神大道』の概要を確認した上で、それまでの著作にみられない「五門の諭え」（寛本人の表現ではないが、本稿では便宜上このように呼称する）という「惟神道（神ながらの道）」を修

める為の手順を示した言説と、その手順を踏んだ理解の具体例として天之御中主神と天照大御神の関係を示した言説に焦点を絞って考察を展開した。

一 『惟神大道』の概要について

本稿作成にあたり閲覧した『惟神大道』は、寛克彦の娘婿三瀧信吾旧蔵の和装本（全五一三頁）である。題名は表紙に墨書された「惟神大道」という朱書きの文字と、本文冒頭に記されたタイトルに由来する。題箋はなく、「寛克彦先生『惟神大道』満州国皇帝への御進講録」と記された袋に保管されている。

本文は昭和一九年の御進講を和紙にタイプ打ちしたもので、そこには後の公刊を期したと思われる数々の修正・訂正が加えられている。また、本文後ろに設けられている目次に、速記録という記述があることから、速記録を活字に起こしたものと考えられる⁽¹⁾。なおタイプ打ちした時期、人名については奥付がなく、詳細な事情は不明である。三瀧は、このタイプ打ち冊子が複数存在していることを指摘しているが、平成二七年時点で執筆者が確認できたものは、三瀧信吾旧蔵の一冊のみである。

つまり『惟神大道』を現代出版の觀念から表現すると、校正段階にとどまっている書籍といえ、一般書店で流通し

ている書籍として認識すべきではない。例えば第二回の冒頭（二二頁）では「陪聴者」の「陪」という文字がタイプできず、その文字が手書きで加えられている他、二四頁では「程度こそ違へ」という表現が「程度こそ異へ」とミスタイプされているので朱書きで修正が加えられている。また第三回到「上図」「第六図」「第一六図」の記載があるが、本文にそれらの図は見られない。これは『惟神大道』の付図の多くが、簡単な糊付け等で添付されている状態なので、紛失してしまった可能性も考えられるが詳細は不明である。さらに時代的な事情からか、タイプ打ちされた文字に酷いかすれのある箇所が少なくない。寛の著作や思想を知る者であれば、前後の文脈から判別できる箇所も多いが、すぐに文字を判別できない箇所があることを指摘しておく。

しかし当然のことながら、そうした書誌状況が御進講の内容を貶めるものではない。そこで肝心の内容を把握する為、まずは構成を確認していこう。『惟神大道』は左に挙げる寛の言葉から始まる。

御進講の御命を拜して、謹み御前に立ちました。かしこみ思ひまするに、是は、陛下が御心の内なる靈鼓に加へしむるに外臣の拙なき発を以てして、御親らの鼓声を外に聞こしめし給ふ御業と存じ奉ります。進講者は実質上何物をも加へ奉ることを得ませぬ。外臣修養

未だ中ばにして、又、辞に達せず、且宮中の礼に習はず恐懼罷り在ります。

これ以降、全二〇回の御進講は、その内容を一回ずつ分割した二〇のパートによって構成され、その後ろに「皇帝陛下御言葉」「摘要」「本文の目次」「図の目次」が続く。因みに「皇帝陛下御言葉」では、炎熱の中に進講を行った寛への劳いの言葉と、握手が交されたことが記されている。⁽³⁾

なお、目次に目を向けると、活字化された御進講を時間軸で追える一般的な目次の他、御進講の内容を端的に理解するための目次（摘要）、さらには図のみの目次が付加されている。（ただし本文の目次は、講義回数⁽⁴⁾の二〇ではなく、御進講の内容によって分類・構成されている）その目次を全て挙げる許された紙幅を超過する為、本項では「摘要」を挙げ全体内容を把握したい。

門鍵「心のまこと」を捧げて神を拝るがむ

第一門 晴天門

大観 天照大御神は神の中核にして神の全一とま

します

第一道 天祖を仰ぎ奉る（天晴れ中に於ける天晴

れ）

第一路 別天神並神世七代の神神

第二路 三種の世界

第三路 那岐・那美二神の国生み・神生み

第二道 皇祖を仰ぎ奉る（天晴れ中に於けるあな

面白）

大観 大御神は三界の総主と坐す

第一路 弥栄の万世一系

第二路 御位種子之神

第三路 和魂 荒魂

第四路 一切の不完全を引受け給ふ

第五路 本末を序づるにより一切を彌々本に

帰せしめ給ふ

第三道 国祖を仰ぎ奉る（天晴れ中に於けるあな

手伸し）

第一路 高天原に於けるの肇国の種子の準備

第二路 葦原に於ける肇国の種子蒔きの田畠

の準備

第四道 道祖を仰ぎ奉る（天晴れ中に於けるあな

明け）

第一 天津日嗣彌栄の御神勅

第二 斎鏡の御神勅

第三 思兼の御神勅

第四 天津神籬天津磐境の御神勅

第五 侍殿防殿の御神勅

第六 齋庭之穂の御神勅

第五道 治シロシメスモトノミヤ 祖ミコを仰ぎ奉る（天晴れ中に於けるおけ）

第二門 昇日門アタリノカド

第一道 皇室の御高德

第二道 臣民の基本道徳

第三門 家ミツ 国タタ 門カド

大観ミウタタ

第一道 肇国

第二道 八紘一字

第四門 明道門ヨツメノカド

第一道 惟神道

第二道 祭政一致

第三道 惟神道と諸教との関係

第一路 惟神道と諸教との精神について

第二路 諸教と団結について

第四道 世界全人と惟神道との関係

第一路 前置き

第二路 本論

第五門 進進門イツツメノカド

弥栄 惟神道と満州国との関係

右を参照すると『古神道大義』『統古神道大義』『神なが

らの道』に類出する「三種の世界」「御位種子之神」と

いった用語を確認することが出来るが、それと共に戦前の

著作には見られない特徴を指摘することができる。それが

戦後の著作『大正の皇后宮御歌謹釈―貞明皇后と神ながら

の御信仰―』（寛克彦博士著作刊行会、昭和三六）に見られる

「門」といった概念を用いた説き方「五門の喩え」である。

これは重要なポイントであるため後に詳しく論じる。

またその他に特徴として挙げられるのが、第二回以降、

各回の冒頭に記された左に示す御神拝である。

陛下に倣ひ奉り進講者陪聴者等

伊勢大神宮

建国神廟

の方向に向ひて神拝を行ふ

二 拝

二 拍手

天 晴 レ

アナ面白

アナ手伸シ

アナ明ケ

オケ

二 拍手

一 拝

現在の神社神道では「二拝 二拍手 一拝」という神拝作法が一般的だが、寛の神拝作法はそれと異なっている。二拝二拍手までは同じものの、それに続き「天晴 アナ面白 アナ手伸シ アナ明ケ オケ」を唱え、その後再び「二拍手」を行い、そして「一拝」を行っているのである。この神拝作法は「惟神道（神ながらの道）」を修める際、神を拝む行為を徹底させる存在として詳しい説明が加えられているが、これも後述する。

以上、本項は大まかではあるが『惟神大道』の書誌的情報と、その特徴を指摘した。

二 未公刊書籍における『惟神大道』の位置について

先述した通り『惟神大道』は皇帝陛下への御進講の内容を記したものが、平成二七年現在、実質的に未公刊史料の位置づけにあるという事情から、その内容は勿論のこと、周辺事情もまた詳らかになっているとは言い難い。そこで本項は『惟神大道』の理解を促進させる為、そして次項の考察に資する為、戦後における寛の未公刊書籍の状況と、そこにおける『惟神大道』の位置を確認したい。

寛に明治四四年出版の『仏教哲理』を始めとする様々な著作が存在することは周知の通りだが、それと同時に未公

開の書籍・原稿があることもまた、研究者を中心に知られている事実である。結論から述べると昭和二〇～三〇年代に未公刊書籍として挙げられたものは、平成二七年現在、ほぼその範疇を脱している。ただし昭和五六年、寛克彦の娘婿である三瀧信吾が、原稿のまま残された論文等が菊判で一万ページほど存在することを指摘し、順次公刊していく必要性を訴えているように、⁽⁵⁾いまだ書籍としての構想に至っていないかつた多数の原稿はその限りではないにせよ、本項ではこれまで未公刊書籍と呼ばれたことのある著作に焦点を絞り、その状況を確認する。

まず指摘すべきが『偉聖菅原道真公』である。これは北野神社（現在の北野天満宮）で斎行された菅原道真の生誕一〇〇年並びに御鎮座一〇〇〇年の記念大祭に合わせて寄進した一文に補正を加えたもので、昭和一九年の出版を考えていたが、戦況激化・敗戦といった事情のため出版できなかった経緯をもつ。この状況が変化したが昭和三四年のことで、寛の米寿を祝賀した知友門弟有志たちの働きかけにより寛克彦先生米寿祝賀会が組織され、『偉聖菅原道真公』（米寿祝賀会 昭和三四）として公刊されるに至った。

『偉聖菅原道真公』が公刊された時点、すなわち昭和三四年時点における未刊行書籍の状況を窺えるのが「寛克彦先生略歴 寛克彦先生著作一覧」というA4サイズ一枚の

史料である。(これは『偉聖菅原道真公』にも封入されている)ここに大量の未発表原稿の存在と並び、幾つかの未公刊書籍が記されているわけだが、それが『皇学研究図』『満州国皇帝御進講録』『貞明皇后御歌謹解』である。史料には明治四四年の『仏教哲理』から『古神道大義』『神ながらの道』『日本体操』『大日本帝国憲法の根本義』といった著作が出版年と共に紹介され、その後ろに左の記述が続いている。

○ 未刊、皇学研究図(三〇〇余枚)

○ 未刊、満州国皇帝御進講録(神ながらの道)

○ 未刊、貞明皇后御歌謹解(近刊の予定)

二つ目の「満州国皇帝御進講録(神ながらの道)」が本稿で扱う『惟神大道』のことで、未だ書籍として公刊されていない状況にあるわけだが、他の二書に関しては既に公刊、もしくは一部が公刊されている状況にある。

まず「皇学研究図」は、その一部が『皇学図録 第一卷』(立花書房 昭和三六)として公刊されたが、これは昭和三六年度文部省研究成果刊行補助金を受け、寛泰彦が編集したものである。その「まえがき」には昭和二〇年頃までに算の作成した図が約百三十に達したことと共に、昭和二〇年以降、講義や講演の補助的なものではなく、図のみで思想内容を解示しようとする方向へ進んだこと、その数

は約二百七十に達したこと等が記されている。ただ左の記述から、全ての図が収録されたわけではないことが分かる。こゝに収めた皇学図録第一巻は主として前記のもののうちから、皇国体並に憲法・法学に関するもの六十七図を選んで四十八図に仕立てたものである。著者の思想の一そう円熟し、図も一入精彩を加えた後期の作はその内容の片鱗を「第一図(番外)皇学図録索引」に窺はしめるに止め、これを次巻に譲らざるを得なかつた。⁽⁶⁾

因みに『皇学図録 第一巻』の続編は現在に至るまで刊行されていない為、寛晚年の皇学図は未だ世に出されていないということになる。一部が公刊された：というのはこういう意味である。

続いて「近刊の予定」と記されている「貞明皇后御歌謹解」は昭和三六年に『大正の皇后宮御歌謹釈―貞明皇后と神ながらの御信仰―』(寛克彦博士著作刊行会)として公刊された。これは貞明皇后の御歌を「神ながらの道」から謹釈したもので、陛下の御目に入れようと執筆していたものの、完成に至る前に崩御されてしまったという来歴を持つ書である。その後、算は原稿を完成させ、出版を心待ちにしていたものの、昭和三六年二月に急逝してしまう。よって昭和三六年に出版された『大正の皇后宮御歌謹釈』も

『皇学図録 第一巻』も寛没後の出版ということになる。

このように未刊行書籍が次々と公刊されていく中、最後まで手付かずで残ったのが「満州国皇帝御進講録（神ながらの道）」すなわち『惟神大道』ということになる。なお教学叢書の第九輯として編まれた『惟神の大道』（教学局昭和一五）は書名こそ類似しているが別内容のものである。

三 御進講についての言説

本項では寛の御進講についての言説を取り上げる。まずは実子寛泰彦の「父寛克彦のことども」は御進講の様子を左のように記している。

昭和十九年には満州国皇帝から父に神ながらの道を進講するように、との命をうけました。これは関東軍あたりの指金もあることと考えられましたが、父はこの機会に自己の正しいと信ずる考えをそのままに進講しようと考えたようです。事実この進講では、根本からではありませんが、随分現実の戦争に対するきびしい批判もいたしました。それにはもとよりそれ相応の覚悟をしていたようで、恐らく無事に帰れるとは考えていなかったのではないのでしょうか。没後筐底にあった遺歌はこの出発の際に読んで残して行ったものと思われます。特にそういう不慮の際を思いはかって次男のわ

たくしに同行を求めました。幸いにわたくしは東大から出張の命をうけることができました、ともに満州国へ渡りました。しかし、この滞在中本土は空襲にさらされ、東条内閣は倒れ、小磯内閣となり、関東軍も本土防衛のため、満州から大部隊を引上げるなどの大騒ぎとなり、朝鮮海峡も敵潜水艦の勢力下に入って、帰路を遮断されることになりましたが、奇蹟的に帰国することができました。

戦況が激化する当時の状況だけでなく、御進講を取り巻く苛烈な状況も窺うことができる。次いで寛克彦の娘婿である三瀧信吾も御進講の様子を左のように語っている。

戦時中、昭和十五年には新京に飛んで、満州国皇帝にも「惟神大道」として御進講され、この御進講録は和文タイプされて数部が現存して居るが、外国人に説かれたものでもあり、一層解り易い、且、貴重な資料である。

この昭和一五年云々というのは、昭和一二年の満州国建国大学名誉教授就任等に伴う渡満に基づく表現と思われるが、御進講自体は昭和一九年のことである。

次に挙げるのが御進講を「荒唐無稽にすぎた」と評する入江曜子である。『貴妃は毒殺されたか 皇帝溥儀と関東軍参謀吉岡の謎』（新潮社平成一〇）における関連箇所を左

に挙げる。

片倉の推薦をうけ、古事記を素材として「惟神道」を熱心に講じたのは、東京帝国大学名誉教授筧克彦である。大学でも「いやさか！」と第一声を発して講義をはじめることでも有名だったこの国粹主義者は、天御中主神——天の真ん中に位置するこの神話の主を中心にし、何枚かの絵図まで用意した熱情をこめた講義をした。世界の宗教を一本の木にたとえ、幹は神道、枝葉は世界のさまざまな宗教であることを図解して説き、あるときは一杯の清水と、醤油、酢の瓶などが並んでいる絵図をしめして清浄な清水は神道、醤油や酢は儒教、キリスト教、回教などで、すべては神道がみなもとである、という。⁹⁾

入江はノンフィクション作家であり研究者ではない。さらにこの引用箇所は、溥儀と関東軍の吉岡安直少将（満州帝室御用掛）・片倉衷少佐のやり取りを中心とした部分であり、寛についての分析に注力した部分ではないにせよ、「国粹主義者」という認識を示したうえで、その内容を紹介しているのはたいへん興味深い。しかし前項で示したように御進講内容を記した『惟神大道』が当時公開されていたわけではない。入江は如何なる史料に基づき、この記述を為したのであるうか。その参考となるのが、溥儀が中華人

民共和国に囚われた後に記した『我的前半生』（新華書店北京発行所 昭和三九）である。日本国内ではその翌年邦訳『満州国』皇帝の自伝 わが半生』が出版され、昭和五二年に筑摩書房から『わが半生』が出版されているが、溥儀はその書で御進講の様子を左の様に述べている。

私と傀儡の大臣たちに「神道」思想を受け入れさせるため、日本関東軍はめんどろもいとわず、わざわざ著名な神道家筧克彦（日本皇太后の神道講師だということだった）を招いて、私に進講した。この神道家は講義のとき、いつも奇妙キテレツな教材をいろいろ持ってきた。たとえば一枚の掛図で、一本の木が描いてある。彼の話では、この根は日本の神道と同じで、上の枝は、各国のいろいろな宗教である。いわゆる八紘一宇という意味は、すべてが日本という祖先に源を持っているということなのだ。また一枚の紙には一杯の清水が描いてあり、そのそばに醤油の瓶・酢の瓶などがいくつか立っている。清水は日本の神道で、醤油や酢が世界の各宗教、たとえば仏教・儒教・道教・キリスト教・回教等々だという。日本の神道は清浄な水のようなもので、他の宗教はすべて日本の神道に源を發している、というのである。そのほか奇妙な説がいろいろあったが、くわしいことはもう忘れてしまった。講義

を聞くとき、日本人がどう考えたか私は知らないが、私自身と傀儡大臣たちは、いつも笑いたくなるのを押さえきれなかったし、眠ってしまう者さえあった。あだ名を大頭の手という「軍政部大臣」于深澁は「道」の講義を聞くたびに首を横に曲げていびきをかいていた。¹⁰

皇帝が戦後において戦前を回顧した様子を窺えよう。そして木・清水のたとえ話が重なることから、入江の評論は右の記述に依拠していると考えられる。

ただし『我的前半生』（我が前半生）が、中国当局や専門家が手を加えた書物であること、遼寧省撫順の戦犯管理施設等で「学習」をした結果の書物であることを考慮に入れることは勿論、昭和三九版の削除・修正部分を改めた「完全版」が、平成一九年に群衆出版社から出版されていることに注意を払わねばならない。極東国際軍事裁判で行った偽証の謝罪、日本軍と満州国との連絡役を務めた関東軍将校の吉岡安直に罪をなすりつけたことの反省などが盛り込まれており、昭和三九年版の記述をもって、昭和一九年における溥儀の胸中、さらには執筆時の胸中を示したものは言い難いからである。

これは入江と同じくノンフィクション作家である工藤兼代子も『母宮貞明皇后とその時代』（中央公論新社 平成一

九）で指摘するところである。朝日新聞（平成一八年二月一七日）が報じた記事「日本軍への支援『自ら命令』東京裁判偽証『わびたい』」に記された「すべてを関東軍と吉岡のせいであるかのようにしたが、事実はすべて私が自発的に行ったことだった」という溥儀の証言を引きながら、溥儀の証言に代表される東京裁判や、そこから派生する歴史観の検証を訴えている。

そもそも寛を丹念に調べた者であれば、実子寛素彦の『今上陛下と母宮貞明皇后』（日本教文社 昭和六二）に記された「大宮さまの御学問と歌道」における皇帝についての記述を見逃すまい。ここには貞明皇后と寛克彦の交流が記されると共に、皇帝との交流が記されているからである。「満州国皇帝訪日の際の皇太后陛下は、まるで本当のお子様のように深い慈愛をお注ぎになったので溥儀皇帝もまた深く感動され、本当の御親子のようであったと言われる」という記述や、皇帝が東京裁判で色々と問題の多い発言をしたことを貞明皇后が残念に思召された記述がそれにあたるが、そうした沿革・事例を無視して特殊な状況にあった皇帝の言に依拠し、心中を語るのは学問として慎むべきものと考える。¹²

また平成一九年版において、寛の登場する部分で指摘される「这一自然段在定本中被删削。书中类似俏皮话被删削

者甚多⁽¹³⁾」という削除部分に関する注釈、さらに完全版の編集状況を踏まえると、未だ状況を断ずるは慎重にならざるを得ない。例えば皇帝は昭和一〇年と昭和一五年に日本を訪問している。工藤は後者の訪日で、貞明皇后をはじめ多くの皇族が皇帝を迎え、皇帝もこれに心から応えたさまを、吉田頼子の手記を参考に描いているが、このように丹念に史料を読み解く余地が残されていることは念頭に置く必要がある。よって御進講に關しても、『わが半生』には斯く記されている……という指摘にとどめるほかない。

皇帝の数奇な生涯は周知の通りだが、本稿は仮定や推論を重ね薄儀の心中を推し量ることを目的としない。そうした関連状況は視野に入れつつも『惟神大道』を着実に読み解くことを目的とすることを指摘しておく。

四 五門の喩え

本項では二つのトピックに焦点を絞り『惟神大道』の神道論を吟味していく。それは「五門の喩え」という「惟神道（神ながらの道）」の説き方と、そこから導かれる認識の一つ「天照大御神と天之御中主神との関係」である。

まず『惟神大道』の全体を俯瞰した際、従来の主張が大きく変化した跡は見られない。しかし、内容を噛み砕いた数々の喩えを始め、従来の説明では理解が難しいと思われる

箇所には焦点を絞った説明など、いわゆる理解を促す工夫が各所に認められる。その意味において、かつて笈泰彦が『神ながらの道』の説明を『古神道大義』といった初期著作に比べ平易かつ円熟という言葉で評したが、『惟神大道』はそこからさらに歩みを進めた跡が認められる。⁽¹⁴⁾「五門の喩え」と「天照大御神と諸神との関係」というトピックに焦点を絞るといのは、そうした工夫を具体的に理解できる格好の事例だからでもある。

まず「五門の喩え」は、惟神道（神ながらの道）を修めるまでの見取り図を「門」「道」「路」という概念で喩えたものである。笈の言を参照しよう。

神に達し神に捧げむとする道たる「心のまこと」を鍵として大門（総門）を開きますれば、そこに惟神道には、五つの門（入口）が御座います。⁽¹⁵⁾

五門とは五つの門のことであり、具体的には「天晴門」「昇日門」「家国門」「明道門」「進進門」を指す。そして各門の先には「道」「路」が存在し理解の軽重や経路が示されている。第一門の晴天門を例に挙げる。門の先にある第一道には三つの路、第二道には五つの路、第三道には二つの路、第四道には六つの路の存在が指摘されている。なお「五門の喩え」は、『古神道大義』『統古神道大義』『神ながらの道』といった戦前期の著作に見ることが出来ない大き

な特徴である。

ただしそれは「五門の喩え」を『惟神大道』以外の著作に見ることができないことを意味しない。前述の昭和三六年に刊行された『大正の皇后宮御歌謹釈』に五門の存在が確認できるからである。この本は「藤の巻」「楓の巻」「萩の巻」から成っており、中でも「楓の巻」に力が注がれている構成となっているわけだが、その目次をみてみよう。「御歌」「諸言」「世界 三種の世界」と記された後に「第一門 天晴れ」「第二門 あな面白」「第三門 あなたのし」「第四門 あな明け」「第五門 おけ」という構成が確認できる。要するに陛下の御歌を、各門の意義に従い分類した上で解説を加えているのである。例えば「第一門 天晴れ」では「そこまでも 心澄まさむ まことより 外には浮かぶ もののなきまで」という御歌から「大御身に すべてのおつみを 負ひまして みそぎしませる 大神かしこ」までの三一首を挙げ、其々に謹釈を加えている。これまで「五門の喩え」は著作の上においては『大正の皇后宮御歌謹釈』で突如現れた観があったが、『惟神大道』の内容が判明したことで、その神道論の沿革が正確に理解できるようになったといえよう。

(一) 「心のまこと」について

—その意義と発揚プロセス—

では次に「五門の喩え」を具体的に読み解いていくにはどうすればよいか。それは各門の定義を眺めれば良いわけだが、その確実な理解の為に「心のまこと」という概念を理解することが重要となる。前掲の引用に「心のまこと」を鍵として大門（総門）を開きますれば」という記述があったが、寛の言に従うなら、この概念を理解しなければ、大門を開くこともできなければ、五門を見ることもかなわれないからである。

寛は左の様に述べる。最も確実な存在たる神を窺うには「心のまこと」が必要であり、その「心のまこと」を発揚する最も早く完全なる方法は神様を拝むことだ⁽¹⁶⁾。そして神様を拝むことは、惟神道の手始めであると同時に、惟神道の極致でもあるというから、これが単に「心のまこと」発揚の一チャートとして限定されているわけではないことに注意を払わねばならない。「心のマコトを振り起こすことによつて神様をお拝み致しますが、神様をお拝みすることによつて心のマコトが成ります。そこでまた更に心のマコトを発揚いたしましたし神様をお拝み致しますると、その心のマコトが彌々徹底して参ります⁽¹⁷⁾」とあるのはその

証左である。

ただしこの主張はいささか難解である点も否めない。そこで「心のまこと」を別の言葉で理解するならば「天晴アナ面白 アナ手伸シ アナ明ケ オケ」に注目するとい。幾分かの補足説明は必要となるが、この心持が「心のまこと」として説かれている部分があるからである。

また大門を開く鍵としての位置づけを考える上で、今一つ注意すべき点がある。それは「まこと」が人と神とを一続きの存在へとつなげる紐帯となっていることである。それは寛がその心を持つ人を「真人・ミコト」と呼び、神の場合は「命・尊」と称していることから明らかだが、今少し詳しく見てみよう。まず人と神とが一続きの関係を保持していることは『惟神大道』に始まったものではなく『神ながらの道』においても主張されていることである。ここでは「心のまこと」ではなく「生命」がその役を果たしているが、その例を左に挙げる。

人といふ人、生きとし生けるものは皆此の大なる天然の力、不可思議の作用に依りて生活致して居らぬものはございませぬ。別別の生命を有する無数の人達なれども、其の根本に這入って見ますれば皆同じ大生命に帰着し、一つの小生命より進入して、有らゆる小生命に共通なる根本に達し、夫より有らゆる小生命に通ふ

ことが出来(第三図の二)、結局、一切の小生命を網羅し、一切の小生命により表現せられつつある、唯一の普遍的な大生命になつてしまひます(第三図の二参照)、此の種の普遍的な大生命が即ち神様であるとも申されま(19)す。

なお、神様を拝む営みを徹底させる形式として神拝作法が挙げられ、寛はそれを「神人合一を達成せんとする行」と説明しているが、これはオカルティックな儀式や思想を薦めているのではない。右のように本来は一つにつながっている…という理解に基づく言説であることを理解すべき箇所である。大門を開く鍵という言葉の底には、こうした理解が横たわっていることは見逃し難い。なお鍵という喩えは、一度扉を開いてしまえば用は無くなる…というイメージから、過小評価する可能性も考えられるが、それは右の理解からも誤りであることを指摘しておく。

この「心のまこと」発揚プロセスについて記されているのが第一回の御進講である。寛によると「心のまこと」を発揚するには、物を考えるにあたっての心の段階を認識する必要があるという。それが「感覚知覚」「人、我及財の意識(我ごころ、人(他)ごころ)」「国の意識(国ごころ)」「天地(大宇宙)の意識(天ごころ)」「神の光明の意識(日ごころ、日の本ごころ、天晴 あな面白 あな手伸し あな明け

おけ」である。これはどれか一つが良いという趣旨で説かれていたのではなく、「感覚知覚」から順番に人の意識を下位から上位に向けて説明し、「心のまこと」発揚のプロセスを正確に説明しようとしたものである。順に説明を加えよう。

まず一つ目の心の段階「感覚知覚」とは視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚という五感に知覚を加えた六つの感覚を指す。算がこれらの感覚を「この五感と近くの六つのものは何れも外界外物を認識致すについて材料となる大切な心」と認識しているのは興味深いが、兎も角この段階は自分という存在に限定した心の様子を示していることが理解できよう。

続く二つ目の心の段階が「人、我及財の意識（我ごころ、人（他）ごころ）」である。これは一つ目の心の上位にあるもので、端的にいうと自分と他人をどう考えるか？という人我意識の段階を指している。自分を認識する我の意識・他者を認識する人の意識に、財物の意識が従属することも指摘されているが、ここで重要なのは「我」「人」という心が「離れざる心」と表現されていることである。これは人と人とは本質的につながった存在であることを示しており、この理解が不十分だと、十分な発揚は望めないし、言説の理解としても不徹底になるので注意を払う必要がある

る。

三つ目が「国の意識（国ごころ）」だが、これはいわゆる国家意識・国家精神をどう考えるか？という段階である。これについて算は左の様に説明を始める。「さてこの『人の心』といふ所までは一般に東西共に覺られて居り何処でも喧しく申されて居りますけれども、その上の『国の心』（国心）と申すものになりますと、之を寛らず、⁽²³⁾ 問上乃至宗教上も之を捨て置く所が多いのであります」と。その上で、日本ではまず個人・個我の後に国というものを感ずるのでなく、「自分は国であり、国は自分である」と感じる特徴があることを指摘する。「さういふ国と離れぬ人我が五感を働かして外界を認識して居ります」との言は、「心のまこと」を発揚する為には、自分と国とが本質的につながっていることを自覚した段階に至ったうえで、ここまで挙げた二つの心を連携させることの重要性を喚起したものである。

四つ目が「天地（大宇宙）の意識（天ごころ）」だが、ここから算の特徴が、より濃く表れてくるといえよう。というのも算は「心のまこと」を発揚するためには、一つ前の「国心」からさらに歩みを進めることを訴えている。そして「国心」の奥に存在する「天地の心（天地心）」「天心」という天地と一体となる心が存在し、そこに至る必要性を

述べているのである。寛はこれを「之は平かなる大いなる偏らざる心で御座います。日本に於てばかりではなく、漢土に於きましてもこの『天地と一つの心』を大事に致して居るのでございます」と述べ、古来から多くの人がこの「天心」の発揚に努めてきたことを述べる。因みに支那では道心、仏教ではアラヤに相当するも、仏教においては「国心」が欠落しているとの分析を加えている。

最後の五つ目が「神の光明の意識（日ごころ、日の本つ心、天晴 あな面白 あな手伸し あな明け おけ）」である。これは平らかなだけでなく、そこに輝きのある段階であり、生命の輝きと心の輝きがピタと一つになって光っているもの、最も根本で神様と最も近い心…と寛は指摘する。⁽²⁷⁾「心のまこと」を発揚するとは、この段階に到達した上で物事に臨むことを示していると言える。

とはいえこの段階は前の段階とどう違うのであろうか。寛は仏教の第九識、キリスト教のニムブスといった他教における当該段階の到達例を挙げているが、結論として生成発展を伴うものとして表現されていることが理解できる。寛はこの段階にある心を「ヒゴコロ（日心）」と呼称し、その徹底されたものが「日の本つ心」「カムナガラノココロ（惟神の心）」「清明心」「心のマコト」「皇産霊」と呼ばれることを紹介しているが、この心には万物を生む性質が

あるという。つまり天心のように平らかで偏りのない段階で止まるのではなく、それらを含んだうえで発展、生長していく段階の心を指しているのだ。

そしてこの「日心」を偏らず純真に見ていくと、「天晴 アナ面白 アナ手伸シ アナ明ケ オケ」と言うしかないと述べるのである。⁽²⁸⁾これが本項の冒頭に、この言葉をもって「心のまこと」を理解すればよいといった理由でもある。ではこの唱え言葉は何なのか？というところ、これはそもそも『古語拾遺』の天岩戸の段に記されている言葉である。八百万の神が天照大御神を称えた言葉でもあるが、寛によると、左の心持が含まれているという。⁽²⁹⁾

天晴レ 平らかなる大きな心【青天の心…現人

（肉体人）には測り知ることのできない天照大御神の御徳が、広大公平に一切を蓋う有難さ】

アナ面白 温かく輝いている心【白日の心…天照大

御神の御徳が昇る日輪の様に、真中（御中）から輝き温かく輝くさま】

アナ手伸シ 一字の心【天照大御神の御神徳が無限・

広大に、大本より本末を立てて具体的に輝くさま】

アナ明ケ 清涼透徹の心【明道心…天照大御神が道

の大本であるさま】

オケ 「天晴レ アナ面白 アナ手伸し アナ

明ケ」を祝い奉る

また右の「天晴 アナ面白 アナ手伸し アナ明ケ オケ」は、大御神様の御神徳であると同時に、神側に立ち勇氣を出して追い進む人間の心であるとも説かれている⁽³⁰⁾。

ここまで第一回を中心に内容を確認してきたが、それをまとめると、人の認識は五つのステージ・レベルがあり、その最終ステージにまで至ってこそ「心のまこと」を發揚できること、そしてそれは「天晴 あな面白 あな手伸し あな明ケ おけ」の理解に集約できることを確認した。

(Ⅱ) 神拝作法について

― 神様を拝むことを徹底する形式 ―

前パートで神様を拝むことが、惟神道の手始めであると同時に、惟神道の極致であり、「心のまこと」を發揚する最も早く完全なる方法であるとの主張を確認したが、それを徹底させる方法として、神拝作法が示されている。それが「二拝 二拍手 天晴レ アナ面白 アナ手伸シ アナ明ケ オケ 二拍手 一拝」だが、筧はこれを左の様に表現している⁽³¹⁾。

扱神様をお拝み致しまするには、之を徹底するに付て

形式が御座います。形式は末で御座いますけれども、

而も欠くことの出来ぬもので、それにより本が本として彌々徹底して参るので御座います。その最小限の形式にして心と最も離れざる所の神拝形式、心のまことの満足し得る神拝形式は、次のもので御座います

二拝

二拍手

天晴レ

アナ面白

アナ手伸シ

アナ明ケ

オケ

二拍手

一拝

右は前述した通り、現代における神拝作法とは些か趣を異にする。現代の作法といっても、一社の故実等の事情から必ずしも統一されているわけではないが、「二拝 二拍手 一拝」が一般的である。その作法を基準とするならば二拍手と一拝の間に、「天晴レ アナ面白 アナ手伸シ アナ明ケ オケ」「二拍手」が含まれていることになる。なお筧の示す神拝作法に近いものが明治四〇年に定められた神社祭式行事作法における祝詞奏上作法だが、それにせ

よ最後の一拝が一致しない。寛は何故このような作法を唱えるに至ったのか。

その答えは明白である。寛における神拝形式は、深い意味の込められた「行」であるからに他ならない。³²意味も分からず機械的・儀礼的に行うルーティーン動作ではなく、惟神道（神ながらの道）を修める者として必然の動作として提示されているのである。以下第二回の講義内容を元に、寛のいう行としての意義を読み解いていこう。

まず「拝」は「神様を有り難く懐かしみ思ひ奉りてする行」と説明されている。寛によると、世界には、神を畏るべき存在として教える事例もあるが、惟神道において神は父母の如き存在であるという。よって「拝」とは、神を有難く懐かしく思う気持ちを表現した動作・行であると同時に、未だその境地に至らざる者にとつては、その境地に至るための動作・行ということになる。

ではなぜ拝を二回するのか？という問題だが、これは有難く懐かしく思う気持ちを丁寧に表示する為と説明されている。ただしそこには二つの方向性が存在している。一つは丁寧に表示してはキリが無いので、その最小限度が二回であるというもの。そしてもう一つが惟神道は何時でも彌々倍々ということを大切にしているというものである。極論すればこの「拝」という動作を以て、神拝作法を完

了させることも可能ではないか？という疑問も生じる。なぜなら有り難いという気持ちを神様に届けることだけでも、神拝としては十分な意義が認められるからである。ではなぜ拍手という作法があるのだろうか。それは神様への気持ちを自分の身において実践していくという方向性が存在するからという。つまり二拝で止まっているだけでは不十分というのである。寛は左の様に述べる。

惟神道に於ては己を正しくするにより神と一つならむとするので御座いまして、手を拍つ所に神様を迎へ奉りますと共に、神様に向つて参進するので御座います。³³右を寛の言で端的に表現するならば前掲の「神人合一を達成せんとする行」だが、これは神と人とが元々一つの存在であるとの理解の上になり立つものであることを重ねて指摘しておく。というのも「響即神と感ぜられる」と³⁴といった言も、その認識を欠いては意味が大きく異なってしまうからである。なおこの拍手が二回というのは、拝と同じ事情である。

この後に続く「天晴レ……オケ」だが、これは拍手と密着な位置づけを持っている。なぜならばこの唱え言葉は、拍手の際の心持を表わすとされているからである。では拍手の際にその心持になっているのだから、なぜ唱える必要があるのか？という疑問も生じるが、それは唱えることで、

その心を彌々徹底させる意味があるからだという。なお細かく言及するならば、この唱え言葉にある五つは、その内容を一つ一つ離れ離れのものとして考えるのではなく、ピタッと一致させることに意義があるという。

そうなると続く二拍手はいったい如何なる意味を持つのか。前の拍手が「神人合一を達成せんとする行」であったのだから、屋上に屋を架すものではないか？との疑問も生じよう。それに対する寛の答えはこうである。この二拍手は「『天晴レ……オケ』の心を実際に振ひ起すところを捧ぐるもの⁽³⁵⁾」であると。前掲の心持に輝いたところで事終えりとするのではなく、神意（かみのころ）と一つになつたことを有難く思い、之を実現しようとする意気・元気を捧げ、神を祝い奉るために拍手を打つのだという。

そして最後の一拝だが、これは「神様を背中に負ひ奉るころの拝」と位置付けられている。「これは神様を背中に負ひ奉つて、これより世の中に降り、あらゆる事に、神意と一つなる『天晴レ……オケ』の心を実現して参る為の拝で御座います。此の終りの拝は、一度だけにして少し長くなるので御座います⁽³⁶⁾」との言が示す通りである。

なお一般の神拝作法との関係については、対立するものというよりも、程度の差といった観で把握していたことは左の言から窺える。「神拝の形式には簡単にも種々の程度

が御座いますが、心持を大切に致しまする場合には「二拝、二拍手、『天晴レ……オケ』二拍手、一拝」が一般によろしからうと存じます⁽³⁷⁾」

以上、「心のまこと」と、神様を拝む営みにおける循環的發展関係と、それを徹底させる神拝作法の意義を確認した。そこには本来存在している神とのつながりを意識し、そこから進んでいこうという方向性や、その発揚過程が常識のタガを外した突飛なものではなく、一定の思考プロセスに沿っていることが確認できよう。

(Ⅲ) 五門について

—— 大門を開いた先にあるもの ——

ここまで指摘した「心のまこと」を鍵として、門を開いた先に存在するのが「門」「道」「路」である。ここに惟神道（神ながらの道）の全体図が明示されているわけだが、寛が「以上の五つの門の方向から入つて之を試みねば完全では御座いませ⁽³⁸⁾ん」と述べている点に注意を払う必要がある。五門のいずれかで理解を留めたり、他の門との関連性を欠いてしまうと、寛の説く惟神道を歪んだ形で理解してしまう可能性が高まるからである。寛はこれを人間の五感に喩え、その理解を促している。

五門が「天晴門」「昇日門」「家國門」「明道門」「進進

門」の五つを指しているのは、前に指摘したが、御進講では各門の内容が順を追って説明されている。例えば第二回講義では、晴天門を「即ち参入すれば青天の見ゆる門」と説明しているわけだが、五門の内容を確実に理解するには、今少し読み進めなければならない。

そうした際に理解の助けとなるのが、五つの門から惟神道へ入ることを、実際の事実に当てはめて説明している箇所である。ここでは第一門は神様のこと、第二門は神の光に面わの輝ける人、第三門が肇国の根本精神と八紘一字について、第四門が祭政一致、第五門が神様は元気をもって進むべきに進まれる本であり、この神様のままに国も人も元気を以て進んでいかねばならぬこと、と各門で修むべき内実についての説明が加えられている。

ここから寛は右の構成に沿って神道論を展開しているが、本稿はその「五門」を進んでいく過程で、修得される認識の具体例の一つとして、天之御中主神と天照大御神の關係に焦点を絞る考察を進める。寛は自身の著作において天之御中主神に大きな力を認めている一方、それと同時に天照大御神にも大きな力を認めている。これは、ややもすれば、どちらの力が強く根源的なのか、俗な言い方をすれば、どちらが偉いのか?といった素朴かつ根源的な疑問を抱かせる重要なトピックといえる。前掲の入江曜子は天之御中主

神を中心とした図を掲げ皇帝に進講したと記しているが、この言を素直に読めば、天之御中主神が根源神であり天照大御神はそこから派生した神:という理解に至っても不思議ではない。果たしてその可否は如何なるものであろうか。

五 天照大御神と天之御中主神の關係

古今の神道論において天照大御神が重要な位置を占めていることは言うまでもない。それは寛においても例外ではないが、その重要とされる理由において、注意すべき点が存在する。まず第六回講義の一文を左に挙げる。

斯の如くにして、前前回から申し上げました天つ神の御祖としての御徳は、実に天照大御神様が其の内部の内部たる絶対処に具備し給ふ御徳にして、その御徳は別天神並神世七代の神神にいますので御座います。⁽³⁹⁾

天照大御神の御徳が、天照大御神一柱にとどまるという指摘であれば別段驚くことはない。しかし、その御徳が別天神並神世七代の神神にも存在するとの言には注目する必要がある。なぜならば別天神、そして神世七代の神々というのは『古事記』冒頭に現れる神であり、そこに矛盾が存在するからである。なぜならば天照大御神は、伊邪那岐・伊邪那美の国生み・神生みの後、伊邪那美が亡くなり、悲しんだ伊邪那岐が妻を追い黄泉の国へ訪れた後、日向で禊

をした際に生まれた神である。時系列を考えると後に生まれる天照大御神の御徳が、冒頭の天地開闢時に成った天之御中主神をはじめとする別天神、神世七代の神々に存在するという主張は辻褃があわないと考えるのが自然である。

しかし寛によると、これは「大御神様の御徳を物語りによりて寛らしむる為」のもので、即ち本質を物語の表現で言い表したものであるという⁽⁴⁰⁾。つまり文献上では別天神並神世七代の神神が先に存在し、天照大御神が後に生まれた……となっているが、実質的な理解を為すにあたっては、その順序のみに拘るべきではない……と訴えているわけである。神典の冒頭に別天神並神世七代の神神を物語ろうとも、それは天照大御神の大元神、主神たるを否定しないというの、そうした理解に基づいている。これは前掲文にある「御徳」を読み解くことで理解が深まるが、その参考として第三回講義を挙げたい。

第三回講義は、天照大御神が神の中核にして神の全一であることを示す「晴天門」の内容を説く回の一つである。神は大元を辿ると一つの存在であるものの、その考えに至れない理由を四つの条項に分けて解説を加えている。第三回はこの四条項の「其の二」から「其の四」を説き、その後「第二 天照大御神は無上の真神、大本神としての極緻の神に坐します」「第三 天照大御神の御神名について

という項目を設けているが、その中に左の言がある。

以上の如くなれば天照大御神様一言を以て申上げ奉ることは出来ませぬ。天照大御神様は無上の真神、大本神として極緻の神に坐しますので御座います。あらゆる方面に渡りて生き給ひ、総ての生活そのものの根源であらせられます。即ち天地人の根本生命としての其の各方面を兼ね備へ、一切の生命を包容し給ふて御いになります。そして人の生命の根源、生活の中心にまします故に御先祖でいらせられます。人といふ人の、又物といふ物の生命ある所の根源であらせられまして、神の覚信の最も深く公平なる心に有りのままに示現し給ひます⁽⁴¹⁾。

右の言から天照大御神が、この世に存在する生命の根本であり、また生命を包括するものと理解されていることが確認できよう。ここにおいて根本・包括という言葉を通して天照大御神と別天神並神世七代の神神との関係が窺えるが、寛の理解はここで止まらない。第六回講義に見える「天照大御神を仰ぎ奉る方面」―「天祖」「皇祖」「国祖」「道祖」「治祖」―の主張を左に挙げる。

先づ大体を仰ぎ奉りまするに、天照大御神様は天祖としても仰ぎ奉ることが出来ますが、それは大御神様の御拡張の全一の方面であらせられます。大御神様をそ

の中心より仰ぎ奉れば皇祖に坐しますので御座います。この中心たる皇祖天照大御神様が具体的に中程に御拡張遊さるる所に国祖を仰ぎ奉ります。さて、天照大御神様を其の拡張し給ふ全一の方面につき 天祖として仰ぎ奉る場合には別天神並神世七代の神神の御名を以て拝み致しまするし、皇祖として拝しまする場合には、常にただ天照大御神様として仰ぎ奉るに止まり、別の御名義の神様として仰ぎ奉ることは御座いませぬ。そして国祖を拝し奉るは唯々一国の御祖に止まり給ふと申す排斥的の意味で拝するのではなく、又道祖ミチノコトノミヤ・祖シロシメスコトノミヤとして仰ぎ奉りますことは、斯かる天祖、皇祖、国祖たらせ給ふことに従属して大御神様を申上(4)ぐることで御座います。

古典における時系列の記述の奥に、天照大御神の本質的な力の理解が横たわっており、そこから「天祖」「国祖」という位置づけが派生していることを確認できる。よって右の考えに従うと、天照大御神を「天祖」として仰ぐとき、その名称が別天神並神世七代の神神の御名となるわけである。こうした理解は、これまでの『神ながらの道』といった著作から窺い知ることのできない事実ではないものの、その理解への階段が明確に言葉化されており、大きな特徴であると思われる。

おわりに

本稿は未公刊書籍『惟神大道』の周辺状況を指摘した上で、そこに展開される神道論の特徴を確認した。結果として「五門の喩え」といった戦前の公刊著作には認め難い説き方や、『神ながらの道』から歩みを進めた神道論の展開を指摘することができた。神道の教え方・伝え方を研究する神道教育研究にとつては、大変意義深い事例であると共に、近代日本宗教史における人物研究としても意味のある事例であると考えられる。ただし本稿で扱った『惟神大道』はほんの一部に過ぎない。残りの部分については今後の研究に譲り擲筆したい。

注

- (1) 筧克彦『惟神大道』頁四九三
- (2) 三瀨信吾「筧克彦博士二〇〇年祭に当りて」(『月刊カレント』四四四 昭和五六年) 頁一六
- (3) 前掲注(1) 頁四八七～四八八
- (4) 前掲注(1) 頁四八九～四九二
- (5) 前掲注(2) 頁一四
- (6) 筧克彦『皇学図録 第一巻』(立花書房 昭和三六)「まえがき」
- (7) 筧泰彦「父筧克彦のことども」(『学士会会報』六九〇、昭和五二) 頁四九

- (8) 前掲注(2) 頁一六
 (9) 入江曜子『貴妃は毒殺されたか 皇帝薄儀と関東軍参謀吉岡の謎』(新潮社 平成一〇) 頁一四二～一四三
 (10) 小野忍・野原四郎訳『わが半生』(昭和五二 筑摩書房) 頁五六～五七
 (11) 工藤美代子『母宮貞明皇后とその時代』(中央公論新社 平成一九) 頁二三四
 (12) 笈素彦『今上陛下と母宮貞明皇后』(日本教文社 昭和六二) 頁二五一～二五二
 (13) 愛新覚羅溥儀『我的前半生』(群众出版社 平成一九年) 頁二七六
 (14) 前掲注(7) 頁四七
 (15) 前掲注(1) 頁三一
 (16) 前掲注(1) 頁一
 (17) 前掲注(1) 頁二四
 (18) 前掲注(1) 頁五～六
 (19) 笈克彦『神ながらの道 上の巻』(大正二四) 頁一一～一二
 (20) 前掲注(1) 頁二七
 (21) 前掲注(1) 頁九
 (22) 前掲注(1) 頁一一
 (23) 前掲注(1) 頁一二
 (24) 前掲注(1) 頁一二
 (25) 前掲注(1) 頁一三
 (26) 前掲注(1) 頁一三～一四
 (27) 前掲注(1) 頁一五
 (28) 前掲注(1) 頁一六～一七

- (29) 前掲注(1) 頁一七～一八
 (30) 前掲注(1) 頁一九
 (31) 前掲注(1) 頁二五～二六
 (32) 前掲注(1) 頁二六
 (33) 前掲注(1) 頁二七
 (34) 前掲注(1) 頁二七
 (35) 前掲注(1) 頁二八
 (36) 前掲注(1) 頁二九
 (37) 前掲注(1) 頁三〇～三一
 (38) 前掲注(1) 頁三四
 (39) 前掲注(1) 頁二五
 (40) 前掲注(1) 頁二六
 (41) 前掲注(1) 頁六〇～六一
 (42) 前掲注(1) 頁一二二～一二三

※『惟神大道』の本文では、欠字を始め、現代では特殊とされる文章表現が散見されるが、本稿引用部分においては当該表現を改めた。また旧字体は新字体に改めた。

(国立広島商船高等専門学校非常勤講師)